

早池峰・携帯トイレ専用の山を目指して

菅沼 賢治（早池峰にゴミは似合わない実行委員会 代表）

活動のはじまり

「早池峰にゴミは似合わない実行委員会」（以下、早ゴミ）は1990年に早池峰愛好者によって発足しました。発足当初は山頂付近に捨てられたり、岩陰に埋没処理されたゴミの担ぎ下しを行っていました。

1993年11月、山頂トイレの構造（垂れ流し）とその処理方法（ばら撒き）について疑問を感じた山の仲間11名で、し尿の担ぎおろしを行い、翌年の8月、主要な沢の水質検査（5か所）をした結果、4か所より大腸菌が検出され、早池峰の山頂に垂れ流しのトイレがあるのはオカシイと言う、疑問の声の輪が広がりを見せ始めたのです。

1998年7月に「し尿処理報告書」としてまとめ、岩手県自然保護課へ提出するとともに、早池峰山の自然環境に似合ったトイレの早期改善を要望しました。

自然浄化式汚水処理システム

同年の11月に岩手県は山頂避難小屋に隣接するトイレのわきに「前処理装置」を設置し、さらには「土壌処理装置」を地中に埋め込み、土壌微生物の働きで、し尿を自然分解する「自然浄化式汚水処理システム」（以下TSS方式）で改築したいと説明会を行いました。説明によりますと如何にも早池峰の自然環境に適したトイレのように聞こえはしましたが、早池峰山は蛇紋岩で覆われた山であることから、工事には大型機械が必要、又、最終処理施設までの約20mが露出したパイプであること、さらに最終処理施設から放出されるリンやチッソなどが周辺の貴重な高山植物に及ぼす影響など、自然改変があきらかな心配だらけのシステムでした。

早池峰地域保全対策懇談会

私たちは「どんなに素晴らしいトイレを作ったとしても利用する人のマナーが伴わなければ、全国的にも通用する山岳公衆トイレの実現はあり得ない」と訴えながら、「この際、トイレ利用者のマナーの啓蒙も視野にいて、自分の排泄物を携帯トイレで持ち帰っていただくように呼びかけを行う」事を提案したのですが、「そんなバカなことが、できるわけはない夢だ理想だ現実的ではない」と笑われました。私達は山頂トイレについては、将来に禍根を残すことだけは避けなければとの思いで、早池峰に関わる保護活動を行っている早池峰フォーラム実行委員会（以下早池峰フォーラム）とともに、「トイレの改築は決して急がずに、むしろ今、早池峰が抱えている様々な問題を、様々な視点から話し合える場を設ける必要がある、トイレのあり方についてはそこで話しあえば良いのではないか」と提案したところ、岩手県もその提案を認め1999年、早池峰の総合的な問題を話し合う場として早池峰地域保全対策懇談会（以下、保全懇）を立ち上げました。

しかし、構成メンバーを新聞報道で知り驚きました、各市町村・国の出先機関・学識経験者は理解できますが、利用者（岩手県山岳協会）と自然保護団体（早池峰フォーラム実行委員

会・早池峰をきれいにする会)のいずれにも「早ゴミ」の名はありませんでした、トイレ問題が端を発しての懇談会に参加出来ない事に納得がいかず、その理由を岩手県自然保護課に問い合わせたところ、理由どころか「一度発表したことは変更出来ない」と冷たい返事でした、県においては、TSS方式での改築着工をスムーズに推し進めるための策なのだとその時私は感じました。

この事実を世論に訴えさせて頂くことを伝えたところ、「早ゴミ」は実態が不明であるとゴミのごとく捨てられました、担ぎ下ろしのメンバーの大半が所属している「岩手県勤労者山岳連盟」としてならばメンバーに加える事が出来るとの返事をいただいたのです。

担ぎおろしのメンバーにとって、何事もふん張りが大事であると感じた嬉しい結果でした。

担ぎ下ろしを担保に

懇談会は2年間、共通認識をもつためにと現地調査を含めて計10回行われました、この間私達は「垂れ流しのままであるのに関わらずトイレのあり方について話し合うというのはオカシイ、早急に便槽の穴を塞ぐべきである」と要望しましたが、「塞いだら溢れるだろう」という心配の声が返ってきました、そこで「溢れないように私たちが責任を持って対処します」と言う、早ゴミと早池峰フォーラムの担ぎ下しを担保に便槽の穴を塞ぐことができたのです、その後ボランティアによる汲み取りと担ぎ下しにより心配された「溢れる」と言うことは一度もありませんでした。

懇談会の提言

私達は担ぎおろしながら山頂トイレの現状を多くの登山者そしてトイレの利用者に声を大にして伝えました、勿論「登山の前に麓のトイレで用を足していただきたい」ことや「安心のために携帯トイレを用意(所持)してほしい」ことも呼びかけたのです、懇談会も終盤のころあわやTSS方式で決定かとおもわせる場面もありましたが、学識経験者として参加の幸丸先生(県立大)や早池峰フォーラムとの結束でTSS方式を白紙化させ「今後10年間山頂避難小屋の耐用年数に合わせ、岩手県の主体事業としてし尿の担ぎおろしを行い、さらには山頂トイレに携帯トイレ専用室を設け利用の呼びかけも行う」事が懇談会の提言として盛り込まれたのです。(その後の担ぎ下ろしは早ゴミがバックアップ)

早池峰地域保全対策事業推進協議会

2年前「そんな事が出来るわけがない夢だ理想だ現実的ではない」と笑われた携帯トイレの推進を岩手県が中心となって行うことになったのです。決して夢ではない現実化に向けての第一歩でした。さらには引き続き早池峰で抱える問題を話し合っていく必要があるとして「早池峰地域保全対策事業推進協議会」がたちあげられ、協議会の中では山頂トイレのあり方について正に議論ふん糾が続きました。

携帯トイレ利用の呼びかけ

岩手県は2002年より山頂トイレの男性用(立ちしょん型)トイレを廃止し、そこに新たに携帯トイレ専用室を設置し、利用の呼びかけを山開き(毎年6月の第2日曜日)から8月の第一日曜日までのシャトルバスの運航(マイカー規制)に合わせ、関係行政機関とグリーンボランティア(岩手県が募集)とのパートナーシップのもとで「早池峰クリーングリー

ンキャンペーン」を展開し、シャトルバスを利用する登山者に「早池峰マナーガイド」を手渡し、出発前のトイレの案内や「山頂トイレはボランティアがし尿の担ぎ下ろしを行っています、出来る限り環境にやさしい携帯トイレをご利用ください」と呼びかけました。呼びかけ当初は携帯トイレを利用する人が、あたりを気にしながらの状況が3年ほど続きましたが、その後少しずつ理解の輪がひろがりを見せ始め、5年目ぐらいからは携帯トイレを利用せずに既存のトイレを利用する人が、あたりを気にしながらと言う逆転現象が山頂トイレ付近で見られるようになったのです。この変化に合わせ岩手県は山頂トイレの既存のトイレ1室を携帯トイレ専用室に改築し（専用室2室）呼びかけを続けました、今では「早池峰山＝携帯トイレの山」として全国にもその理解の輪が広がっています。

携帯トイレサポート早池峰

呼びかけで、利用者が増えそれに伴い携帯トイレの販売数量もシーズンごとに伸びていきました、早池峰においての携帯トイレの販売は、2000年に岳部落の峰南荘が宿泊者に販売したのが始まりです、その後、河原の坊と小田越の監視員も販売を行っていましたが、携帯トイレの取扱いは業務に入っていないということと、金銭の取扱いは如何なものかと言う指摘があり、携帯トイレの管理組織として「携帯トイレ‘サポート早池峰」（以下、携サポ）を「グリーンボランティア」と「早ゴミ」の有志によってたちあげ、と同時にウイークデー対策として、河原の坊の総合休憩所・小田越監視員詰所・山頂避難小屋の玄関口の3か所に「携サポ」自前の無人販売BOXを設置しました。

山頂避難小屋とトイレあり方検討委員会

山頂避難小屋の耐用年数の期限が近づくなかで、隣接するトイレのあり方についてもさらなる話し合いが必要であるとして、協議会の部会として2008年「山頂避難小屋とトイレあり方検討部会（以下、あり方検討部会）が設けられ委員会のメンバーとして「早ゴミ」も選ばれることとなりました。「保全懇」の立ち上げの際には捨てられた早ゴミでしたが8年目にしてやっと拾われたのです。これで話し合いのテーブルにつけると言う思いでした。

携帯トイレ使ってみでけ day

あり方検討部会において、携帯トイレの呼びかけをして行く中で、携帯トイレを利用する人は350円で、既存のトイレを利用する人は無料では、不公平感があり、この事が携帯トイレ推進の足かせになっている事を指摘し、既存のトイレを利用せずに携帯トイレ専用の日をキャンペーン中に設け検証を行うべきとの提案をしました。岩手県は山頂トイレを全室（3室）携帯トイレ専用室に改築し検証を始めました。「携帯トイレ使ってみでけ day」は2009年は2日間、2010年は7日間、2011年は30日間、2012年は121日間実施し、2013年6月8日の山開きから2015年の今日まで継続しており、2015年1月21日に行われた「あり方検討部会」において今シーズンも引き続き専用化を実施する事が各委員の同意のもとで認められ完全移行化としての新たなスタートラインが引かれようとしています。

専用化これからの課題

早池峰山の場合、携帯トイレの仕入と推進活動、キャンペーン時の販売、ウイークデー対

策としての無人販売ボックスの設置と管理や使用済みの携帯トイレを契約業者が回収、さらには小田越（おだごえ）登山口にシーズン中に設置している仮設トイレの管理と言うところまでは行政とボランティアとの一応のパートナーシップのもとでこれまた一応の骨組みは出来上がっていますが、岩手県が掲げる携帯トイレの専用化に対して岩手県より監視員の派遣とその他の管理を委託されている花巻市、遠野市、宮古市の捉えかたに温度差があるために取り組み方が消極的であり完全移行化のための肉づけができておりません。

携帯トイレは環境にダメージを与えずに用を足すことが出来る究極のトイレ方法と言えます、自分のし尿をゴミと同じように持ち帰るこの行為こそが登山者として自然に感謝をする、畏敬の念を抱くという意識を持つことに繋がるのではないのでしょうか、このような意識を早池峰山に登り楽しむことにより育まれるようにサポートを行うことこそが、関係する私たちの使命であり、この際、将来に禍根を残さぬためにもあらゆるしがらみや、利害を超えて早池峰山の生態系に最もふさわしいトイレ方法と言える携帯トイレ専用化の完全移行を誰もが認めるパートナーシップ（一枚岩）のもとで推し進めていくべきであると私は思っています。

携帯トイレの認知度

岩手県自然保護課が昨シーズンの9月に河原の坊（かわらのぼう）登山口で行った携帯トイレの所持率調査（1日だけ）は75.6%でした、同年8月静岡県自然保護課が富士山の須走コースの登山口で行った所持率調査では18%、早池峰山の所持率が上回っているように思えますが、早池峰山では14年間も組織的に呼びかけているのにまだこの数値であり、野外排泄もいまだに散見しているありさまです、そのような中で呼びかけもせずに18%の所持率と言う富士山の数値に注目しています、わずか数か所で始められた携帯トイレの呼びかけが時代の流れとともに今正に大きく動き出そうとしている証であり、携帯トイレもメジャーになりつつあると感じています。

登山者としての意識

山のトイレ問題は決して早池峰だけの問題ではありません、全国の山々で同じような問題を抱えています、問題の当事者が私たち登山者であるにも関わらず、見て見ぬふり知らぬふり、挙句のはてが有料でもいいからもっと綺麗なトイレを作してほしいと要望しています、そもそも登山というのは自然を求めて山に登る行為なはず、そこに生理的現象だからと如何にも登山者の権利のごとく利便性を求めるのは不自然であり。登るだけ楽しむだけの登山を続けていたのでは、我々登山者自身が自然改変者であり続けてしまう恐れがあります。これからは自分が登ろうとしている山に与える負荷を最小限に止められるような登り方やトイレの方法について、今一度考え正してみる必要があると思います。そして、「この方法ならば自分にも出来るかもしれない」と思える方法を臆せずに試して見る必要があります、この素晴らしい日本の山岳自然を未来の子どもたちに送り届けられるか否かは、今を楽しむ登山者一人一人の意識改革と試みにかかっています、何よりも全ての山々に我々登山者が今、試されていると言うことを肝に命ずるべきです。